

## 第3回北九州ESD検討会 議事要旨

### 【事務局】

ただ今から、第3回北九州ESD検討会を開催する。それではまず、主催者である北九州ESD協議会代表近藤倫明より挨拶を申し上げます。

### 【代表】

前回の検討会では意見募集に提出するためのアクションプラン(案)を議論した。その後、意見募集を行い、多くのご意見いただき、運営委員会等で長時間、時間をかけて真摯に検討し、本日の検討案として提出している。

この間の審議及びご意見等の修正に関わっていただいたことに対して皆さんに厚く御礼を申し上げたい。

本日は、大きなテーマを中心に話していただく。本協議会は15年目になる。歴史的な背景や、北九州らしさ、北九州ESDらしさ、ESDとSDGsの関係、そしてこの北九州という地域が、市民を中心に、ものづくりの町、企業、NPO等、大学も含めた形で協力して取り組んできた。そういう歴史と地域特性を踏まえた方向性を、アクションプランへ活かされるように検討いただければありがたい。

また、前回よりYouTubeでこの会議を公開しており、いろんな方が見る機会を作っている。コロナ禍で会議が公になって、さまざまな方が関心を持たれることは、非常に重要だと思う。

本日の第3回検討会の後、6月の総会で最終的なアクションプランを策定するため、忌憚のないご意見をいただきたい。

### 【事務局】

座長については、前回に引き続き、北九州ESD協議会 近藤代表にお願いする。  
では早速、議事の進行を座長にお渡しする。

### 【座長】

それでは、議事に入る。  
最初に事務局から、このアクションプラン(案)の意見募集の結果について説明いただく。

### 【事務局】

今年の4月13日から5月7日まで、アクションプランの意見募集を行った。提出者は21人・団体の方から140件と非常に多くの意見をいただいた。その反映状況だが、掲載済みが18件、追加修正した分が22件、追加修正なしで、意見として承ったものが83件、そして主に質問等のその他が17件であった。

意見の概要と事務局としての考え方については、資料をご覧ください。

そして、概要版についても、今回、修正等を反映し、整理を行った。以上、アクションプランの意見結果等について、本日も検討いただきたい。

#### 【座長】

それでは、意見交換を行う。前回、前々回まで多くのご意見を伺い、本日が最終的な検討会になる。

140件という非常に多くのご意見の中で、多く寄せられた意見、あるいはESDに対してどう考えるかということも含めて、議論したい。

事務局で、この意見募集、あるいは修正というプロセスにおいて、課題となるような点があったら示していただきたい。

#### 【事務局】

配布資料4の19ページで、「企業とユースをつなぎ、北九州のまちづくりについて考える」という項目について、たくさんの意見をいただいた。

意見として、配布資料3の22ページにあるように、本協議会のESDを推進する若い世代と企業が出会うことの利点や理由を問われている。

事務局としては、回答にあるように、多くの企業が社会貢献活動として、SDGsに取り組んでいる中で、北九州の企業とユースが連携して、お互いに理解することは、将来の担い手を作る、人材育成を図る、ESDの観点からも非常に重要な取り組みではないかと考えているが、委員の方々は、「企業とユースをつなぎ、北九州のまちづくりについて考える」という点において、それぞれの委員の立場で、どのようにお考えかを意見を伺いたい。

#### 【座長】

ユースをどのように育成していくかという、一つのESDのあり方であるが、これからの取り組みにとって、非常に重要で、ESD協議会としてどう考えていくか、議論することは有用だと思う。

これについて、まずは運営委員会の委員以外の皆様から意見をいただく。

#### 【委員】

この件について、先に確認をさせていただきたいが、ユースと書かれている部分について、頂戴した意見を見ていると、大学生が前提になっている感じがする。実際に配布資料4の19ページのところは、学生と社会人がと書いてあるので、これは北九州市立大学の学生のみを想定している表現と思ったものだが、いかがか。

### 【事務局】

このユースについては、北九州市立大学の学生というわけではなく、学生だけではなく、高校生から 35 歳、そういう若い世代の人を対象にユースと見なしている。

### 【委員】

今のご説明を受け、19 ページのところを「学生」と書かない方が良いかと思う。

それからユースが高校生からということだと、指摘の「就職斡旋」とか「青田刈り」というのは、直接的には当てはまらないのではないか。

例えば、SDGs 未来都市アワードで大賞を受賞した福岡教育大附属小倉中学校は、さまざまな北九州の企業と一緒に SDGs に向かい、結果として、大きな学びがあったと伺っている。ユースである子どもたちにとって、親や、教師以外のいわゆるその社会実践者との交流できるという大きな意味がある。さらに北九州で環境に向かっている企業の多くから学ぶべきところがたくさんある。企業の専門的な見地から、いろいろ教えていただくことは、やはり企業にしかできないと思う。

もう一つは、今や SDGs に向かう企業にとっても、単なるその企業の CSR (Corporate Social Responsibility : 企業の社会的責任) の一環というよりも、CSV (Creating Shared Value : 共通価値の創造) というか、価値の共有に向かっていく意義があるのではないかと思っている。実際に、学校と一緒に取り組んでいる企業に尋ねたところ、中学生はターゲット層ではないが、逆に中学生のアイデアが実に斬新で、大変有意義で、まさに win-win であるとおっしゃっていた。

もし、「企業とユースをつなぐ」という言葉が、労働市場におけるマッチング的にとらえられるならば、その表現をやはり若干変えるということで、主旨はぜひ生かしていただきたいと思う。

すなわち北九州の SDGs に向かう企業と若い人たちの連携ということは重要であるかと思う。

### 【座長】

具体的な附属中学校のアワード受賞の話から、教育効果まで、意義のある取り組みなども含めて、ご意見いただいた。

### 【委員】

ユースのとらえ方も企業のとらえ方も、ESDのとらえ方も、ちょっと、アップデートが必要なかと思う。

また別の意見には、多様なコミュニケーションそのものが今、北九州の ESD を進める中で、課題として出てきているとも感じている。

企業というものも従来のいわゆる稼ぐだけ一辺倒の企業という感覚にちょっと囚われすぎ

たままであれば、おそらくそういった見方しかできないが、稼ぎ方が変わってこようとしている中で、またユースも、アグレッシブに情報を求めて動き出している。そういうインタラクティブなコミュニケーションもしくはアップデートされた感覚に、このアクションプランの方向性を見据えて、次の取り組み、さらに耐えうる議論を想定していいのではないか。

もはやSDGsまであと10年ない中で、次の議論する時に、ある種まだその時代の感覚でいるのかということに、違和感を持った。

#### 【座長】

会員にはいろんな方がおられて、おそらく役員会、運営委員会、事務局から伝わりにくいという情報があるので、疑念を持つこともあるが、それに対してどのように我々が真摯に向きあって説明をしていくかということが大切。その意味で、今日議論することに意義がある。やはり何でも話をできるというか、お互いに学んでいこうという立場自体が非常に重要と思うし、ご指摘いただいた問題など、どう協議会で対処していくかが重要だと思う。

#### 【委員】

教育委員会は、どうしても義務制だが、やはりどうユースを育てていくのかは大きな課題であった。そういう面で、教育委員会として、市内にある高専とか、大学とか、企業の若手とか、いかにつながっていくのかを、今、模索をして、連携を始めたところである。

持続可能なまちにしていくために、あらゆる世代を育てていくという北九州市の今回のプランの中でその世代のとらえ方は、私はもちろん大事だと思っている。

特にESD、SDGsで大事なものは、やはり連携で、人と人との連携であったり、組織と組織の連携であったり、組織と世代との連携など、重層的な連携を図っていくことが必要と思う。その連携の中で、地域課題をどのように共有していくのか、また、北九州市の良さをどのように共有していくのか、自分たちのまちの誇りを守っていかなければ、持続可能な社会になっていかないと思う。

また、発達年代に応じて、それぞれの年代をどのようにとらえていくのかを、もっと大事にしなければと思う。特にいわゆるユースという年齢の中にも、いろいろな連携、重層的な連携の中で、やはりその良さを知っていくことが必要だと思う。

今回、「企業とユースをつなぐ」という言葉で、「企業とユースが連携」という言葉としてとらえて、私は全然違和感なく見た。もっとつながっていく必要があると思う。

繰り返しになるが、やはり重層的なつながり、連携を図っていくことが、持続可能なまちづくりに資すると思う。

#### 【座長】

まさに大牟田はユネスコスクールのトップランナーということで、お手本にすべきことが多々あると感じている。重層的な連携とは、我々がつながっていく、それは世代を超えて、

地域を超えてという意味合いで、このE S D、エデュケーションという意味の中に非常に多く含まれると思う。それをご指摘いただき、さらに北九州らしさと、どう結びつくかもご意見をいただいた。

#### 【委員】

私は大学に勤務しているということもあって、ユースのとらえ方をどうしても大学生としてとらえてしまうが、今、本学では実践的なデザイン思考教育の一環として、企業と連携を強めている。その企業とのコラボの中では、E S C (Education for Sustainable Consumption: 持続可能な消費のための教育)の一環としてのE S Dというような、その重要性を考えながら、ビジネスに、特にマーケティングプロモーションや、そのブランディングに軸を置いて、カリキュラムも今後変えていく予定になっている。そういう連携のカリキュラムを、逐次入れている。それを大学の学びの特徴にしていきたいと思っており、地元の企業に就職している方も増えていったらいいと考えている次第である。このような企業とユースを結びつけるような風潮が出てくるのは、非常にウェルカムで、ぜひドライブをかけて行ってほしいと思っている。

#### 【座長】

具体的に企業とデザイン関係でいわゆる産学連携という中で携わっていく重層的なつながり、連携をカリキュラムに織り込みながら、教育を実践されているとのことであった。

#### 【委員】

まず大前提として、ユースに対するとらえ方を、大学生よりも若い世代から、30歳代ぐらいまでの幅広い方という共通認識を持つ必要があると思う。

次に、企業とユースの関係性を深くというのは、全く良いことというかむしろ賛成である。

その理由の一つとして、企業側にとって、これから先は持続可能性、SDGsの経営をしていかなければいけないという流れの中で、これらの教育に関する貢献をしていくことは企業にとっても必須になってくると思う。それはまさに企業の社会貢献でもあり、企業の社員自体の教育、企業内教育という側面でも、企業が取り組んでいかなければいけないと思う。

それから一方で、学校教育に関しては、特に今は探求学習という新しい学習指導要領がスタートして、総合的な探求の時間が始まる。その中には、「連携」がしっかり記されているので、学校は、学外の組織と連携して学びあっていくことが社会的に求められる状況になってきている。

したがって、企業と一緒に課題を解決していったり、学び合ったりすることは、当然世の中の流れとして、出てくると思っている。

そう考えると、ユースの世代、それから企業、その他のいろんなステークホルダーの人が、学び合うこと自体が、まさにE S Dだと私は思うので、そういうニュアンスが少し入ればと

思う。

あとSDGsでも言われているパートナーシップの重要性が非常に重要で、当然意見の食い違いとか、対立はあったとしても、お互いをしっかり認め合うところから、その学び合いが始まると思う。対立ばかりだと、何も先に進まないのだから、しっかり相手の立場や、苦勞など考え、共に良い社会を作っていくことが重要だと思うので、そういうニュアンスがもう少し出ればと感じた。

#### 【座長】

学びを実際に体験している教育機関の方々に対して、ESDの取り組み方や立場の話をいただいた。小中高大とつなぐ、一つのユースの流れの中で、このESD協議会がどう取り組んでいくのかである。それはある意味では、もともとサステナビリティで、その循環という形が、基本的に必要だと思う。

前回も話したが、SDGsは、2030年を目標にしてゴールズとした。本来的にエデュケーションには、ゴールはない。サステナブルとゴールは結びつかないものだが、それほど今の世界は切迫している、切羽詰まっている状況で、ゴールズを設定せざるを得ないような状況であるため、前回私はSDGsを竹の節目であるという話をした。

ただ、ESDのEは、これは人がいる限り、永遠に続く、サステナブルなもので、そういうことも含め、ESDを考えていく必要があると思う。

次は運営委員の皆さん方に意見をいただきたい。

#### 【委員】

企業というステークホルダーで参加しているが、特に印象深かったのは、先ほどの委員がブランディングという話をされた。昨年エコタウンにある環境先進企業に学生を連れていき、今年も行う予定である。その中で、残念なことは、エコタウンにある環境をビジネスにしている企業は、多くても70人ぐらいの中小企業ばかりである。その企業で一番欠けているのは、企業のブランディングである。企業は、ユースである大学生、高校生、中学生とお互いに学び合うことで、どちらかが指導者とかではなく、お互いに欠けたものや、プラスのところを補え合えると思う。今後は、ESD協議会がますます発展するために非常に有効だと思う。

#### 【座長】

企業側から、教育という観点に企業がどのように対応しているかのお話をいただいた。お互いに学び合う、連携をすることに臨める、そういうプラットフォームがESDという協議会でありたいという話だと思う。

### 【委員】

大牟田でESDの大会に行った時、子どもたちが、三池炭鉱が作ったハミングバード(※)の話を生懸命語っている姿がものすごく心に焼きついている。ハミングバードを作ったのは、三池炭鉱などの企業だが、その大牟田の発展を、総合的に大牟田の子どもたちが学んでいることが重層的な連携だと思った。

私は、ESD、SDGsの種である北九州の公害克服の歴史漫画を、毎回取材して、ESD協議会の未来パレットに掲載している。これは社会教育、企業、行政などの連携が北九州のまちの特色で、この公害克服の技術も、企業抜きには考えられなかったと思う。

もう一度学び合いを通じて、新たな連携をつないでいくことが必要と思う。ユースと企業が共にいるんな国際貢献などを考え、新しいメディアなどを通じて発信することが重要であると思うので、今日この議題を取り上げたのはとても良かったと思う。

※ハミングバード：大牟田市の三池港は物流の効率化を図るため、ハミングバード（ハチドリ）の形状で建設された。

### 【委員】

理念的なことは分かるが、これをアクションとして、どのように起こしていくかを考えると、あと10年しかない中で、学生から社会人までのユースをまとめることは、大変だと思う。ESD協議会として、中学校から社会人までの35歳までのユースの人をどのような形で集めるか。中学校、高校は商業体験、企業見学を行っており、大学はインターンなどを行っており、企業がどうあるべきか、教科書等で取り上げられると思う。それとは別に、ESD協議会が何をやはり行うのかを、きちんと考えた方がいいと思う。

私も若干、腹案はあるが、実際に行動する場合において、具体的な取り組みを考えた方がいいと思う。

### 【座長】

それぞれ初等中等教育や高等教育でどういう人を育成するか。大学は卒業に必要となる、社会で生き抜く力を、学位授与方針の中でどういう能力を身につけるかを定めている。その中で、ESD協議会がそのカリキュラムにどう関わっていくか。そのプラットフォームという役割をどう考えていくかという提案だと思う。

### 【委員】

発足当初のESD協議会には、ユースなるものは無かったため、私の所属する団体の学生や留学生たちが、ユースという立ち位置で長く活動していた。その頃の学生が、今30代半ば、ちょうどユースをそろそろ卒業という年代にかかっているが、当時彼らが活動していたことは、直接仕事に結びついているとは思えない。

多様な若者がいるが、彼らは未だに連絡を取ってくれ、学校の組織と違った形で、ずっと

つながりがあり、彼らの姿を定点観測している。その子たちの成長の過程で、大人の私たちも学ぶことができた。

もちろん企業とユースというのは大事で、インターンや企業訪問をたくさん体験できるのはすごくいいと思う反面、それが即ビジネス、即就職にならなくてもESDはいいかと思う。そうでないと、彼らが自分たちのアルバイトの時間を削ってでもやりたかった市民との活動の意義というものは何かと思う。

昨日、奥田知志牧師と内田樹先生の話聞き、「夢は計画なんかじゃないよ。夢は荒唐無稽で叶わなくたっていいのだから、大きなこといっぱい言えるような世の中って必要ですよ。」という内容だったが、これと同じで、一緒にESDがやれることは、実利的なものだけではないことを私は15年間で、若者たちから教えてもらったと思う。今後も、全人格が変容していく様を、私たちがユースから学ばせてもらえたらという気持ちでいる。

### 【座長】

ご自身のユースとのつながりの15年間の体験で、教えるとか、教えられるとかではなく、お互いに学んでいくことが根底にあり、それが、ESDの一つのあり方の方向性、ユニークさかもしれないという発言だと思う。

それでは、このESD協議会の代表として、普段会員の皆さんになかなか話す機会がないので、この場で、私として、ESDとの出会いや、その思い、ユースに関わる点で話したい。

実は、大学は随分変わった。私が学生の頃、40~50年前は、例えば、「大学と企業が連携をする」「産学連携」など考えられない時代だった。「地域への貢献」という言葉自体がなかった。大学の第一の使命は「研究」で、次に「教育」だった。研究と教育が大学の大きな使命で、それが連綿と、明治以来続いていた。

それが大きく変わったのが、2004年にとりわけ国立大学が全て国立大学法人になり、「大学が独自で考え運営するようになりなさい」という改革が行われた。

それに相まって、2008年に大学も含めて中央教育審議会から、いわゆる「キャリア教育」の必要性が前面に打ち出された。それは、持続可能な生涯を通じた教育で生きる力を見つけるというもので、小中高大、全てに関して文科省から出された。そして小中高では、科目は作らず、全ての教科に関連させて職業体験などでキャリアを学ぶ仕組みとした。

一方、大学は、キャリア教育を教育課程の中に位置付けるということを学位授与の方針の中に明記している。これは、能力として身につけるべき力としてキャリア教育、いわゆる生涯に渡り、課題解決に向けた能力を身につけ、社会・世界に対して立ち向かう人を作り出すというもので、実際にそのキャリア教育（キャリアデザイン）が実施されている。

今、国立大学は86あるが、50以上の大学が地域貢献に力を注ぎ、およそ90を超える公立大学、600以上の私立大学の多くも同じである。その理由は、大学は、キャンパスの中だけでは社会人を作ることに限界を感じ、それで、地域と一緒に学生を育てている。

そして、ユースが市民や企業と連携することや、NPOと連携することで、学びたい、学ぼうとする場を作り上げ始めた。現在では、企業や地域と大学が一緒になって、学生たち、次の世代を担うユースたちを育てようということが当たり前となっている。

ESD はまさにそういう一つのプラットフォームである。それぞれ中学校は中学校の、小学校は小学校のカリキュラム（教育課程）があるが、それを、全世代につなげるようなプラットフォームはなかなか無いため、非常に重要な役割をESDは持っていると思う。教育学や心理学では、(D) デイベロップメントを発達、成長と訳すが、我々にとっては、いわゆるエデュケーションという、お互いに学び合う中で、SDというものを考えていく視点に立つのが、ESDの基本的な考え方である。

先ほど言ったようにSDGsは、一つの区切りで、あと9年ぐらいしかない。ただし、それを担うESDは、人がいる限り、あるいは教育を担う限り、持続するという立場である。この役割は非常に大きい。

2016年にロンドンのビジネススクールのリンダ・グラットン博士が「ライフシフト」という本の中で、「人生100年時代」という言葉を用いたが、人生100年の時代の中で、ESDは大変重要である。これは、会員の皆さんがプロジェクト活動や学生たちと一緒にいる活動で、世代をつないだプラットフォームを作ることに貢献していることであり、世代を超えた学び合いである。先ほど年を経ても未だに学ぶことが非常に多いという意見があったが、まさにそれぞれの役割、立場で学び合うということ自体が重要である。このESDのEを、皆さん方は誇りに思っていたきたいし、全ての世代で一緒になって考えていく、学んでいく総体がESDという、そういう協議会になりたい。

その中で、非常に重要なことは、北九州という地域である。ここは環境問題から出発して、企業、ものづくりの地であり、他には、類を見ない、真似のできない歴史を持っている。その歴史を学び、さらに次へとつなげなければならない。

文科省がキャリア教育を、豊かな人間形成と人生設計に資するものと言っている。それが就職斡旋や、「青田買い」ではなく、我々にとってはお互いに学び合っていくという理念がこのESDであるのだろう。

寺坂さん、三隅さんが15年前に本協議会を立ち上げ、その後彼女たちに対して、私たちは今ここまで変わったよと言えるように、我々は恐れず、変化し、継承していくという必要があると思う。

今回、2021年から2025年までのアクションプランでは、その一つの期間のバトンのうち、5年間のという形でまとめてきた。私自身はユースをもう少し幅広く考え、0歳から100歳までの中につなげていきたい。我々ができることは小さな活動ではあるが、会員の方々にはその活動に誇りを持って、エデュケーション、学び合い、重層的な連携を見出していきたい。これが、ESDというものを行う我々の意味だと思っている。

それでは今日は「企業とユースをつなぐ」という項目について、委員の皆さん方からたく

さんの意見をいただいた。理念的なご意見が多かったが。表現の仕方そのものについては、実際に運用しながら考えていければと思う。

その他意見募集全般で、あるいはそのアクションプラン全体で、ご意見があれば、ぜひ伺いたい。

#### 【委員】

会員の方には、否定的なご意見の方もおり、なかなか難しいと常々感じているが、今日この場で企業とユースの連携が大変重要ということが再確認できた。あとは新しい推進体制を工夫して作っていき、皆さんが本当に気持ちよく活動できるような場が提供できればいいと思っている。

#### 【座長】

私も ESD の会員の皆さん方が、誇りを持ってこの活動に参加して欲しいと思う。

ユースに関しては、「私が育てて、私も育てられている」という、そういう思いを感じることができればと思う。

#### 【委員】

配布資料 4 の 19 ページにある企業とユースの項目で、「ユース」と「若者」、「学生」という三つの言葉を全て「若者」にしたら、とてもシンプルになると思う。

#### 【委員】

言葉の問題で、若者というご提案いただいた。このユースという言葉自体は非常に意味があり、ある意味ではグローバルな言葉ではある。ユースという言葉は、ただ単に若いという形じゃなくて、いわゆる世界を目指すというように私自身は感じている。

ESD もそうなのだが、わかりづらい言葉がたくさんある。どう使うかは、今後の課題だが、今のところは若者という言い方も、ある意味では縛りがあり、0 歳には若者とは言わないとも思うので、ご意見として伺っていきたい。

#### 【委員】

前回でも発言したが、評価について、いわゆる定量的な評価、数値で出すことは必要だとは思いますが、何か数値では見えない、定性的な評価を行っていただきたい。

一つ提案で、個人が成長して、個人の変容によっても社会を変える、変容するとプランにあるので、個人もしくはその団体の成長をアクションプランの採択のときに、自分自身が ESD に向き合っている現状分析を行い、そして目標を立てることを取り入れてはいかかがか。きちんと 5 年後の中間評価など取り入れたら面白いと思う。

### 【座長】

実際にどういうふうに評価をしていくか、重要な視点だと思う。例えば、この5年間で、どれほど自らが成長しているか、会員の皆さんがどう考え、一人ひとりの成長の度合いを測れるなど。自分自身のポートフォリオ（学びの経験評価）などができ、会員の皆さん方の強制とかそういう形ではなくて、自発的にプロジェクトなどで指標などが作られれば、それぞれ配布できるのではと思った。

もし可能であれば発言者の責任として、実行をお願いしたい。

また、そういうものをぜひ自分でやってみたいという方に、一つのフォーマットなど作成していただきたい。

### 【委員】

今日は、代表と長く運営委員長であった眞鍋委員に今度の北九州におけるESDとSDGsを、どうつなげていくか、ハンドリングや目標を伺いたい。

### 【座長】

先ほど話したが、ESDとSDGsは基本的に考え方が違うということで、SDGs自体は2015年に2030年を目指して一つの目標を掲げることで作られたが、私の個人的な評価は、あまり良い出来ではないと思っている。それはサステナブルとゴールは、ある意味では矛盾する考え方になる。それで私の中での理解は、SDGsは竹の節で、おそらく2030年あたりから、次の新しいゴールを作らざるをえないような状況になるだろう。

しかし、ESDは、人が、あるいは地球がある限り続く物だという、そういう位置付けと私は認識をしている。

それから北九州においては、行政の方で、SDGsを掲げて、国際的にも高く評価されている。私は実際の取り組みをやっているわけではなく、市の行政のマネジメントをしているわけでもなく、ESDとしてどのように関わられるかという立場である。先日も「Art for SDGs」の実行委員会の中であって、個人的な発言をして関わっているが、行政を管理しているわけではない。あくまでも私たちは、2006年から寺坂さんと三隅さんが始めたESDを継承する中で、それを時代に沿った形に変えていくという意識である。それはアクションプランの中に織り込まれている。

### 【委員】

個人的な話をさせていただくと、SDGsはかなり包括的な話だが、私自身は絶対にESDの方が上位概念だと思って、いつも活動している。なぜかというと、まず地球環境や社会を良くするのも悪くするのも、最終的には人だから、人がしっかり、持続可能性のことを理解して、そういう行動をとることができない限りは、SDGsの達成はないと思う。それほどESDの重要性は非常に大きいと感じている。

ESD for 2030にも、そういうことが明記していると思うが、今一度ESDの重要性が、もっと市民に伝わるべきだと思うし、若い人を育てるときに、ESDというマインドをいかに、心の中に作っていくかがSDGsの達成の鍵であると思う。もっと、ESDの認知が進んでいけばいいと私個人的には思っている。

#### 【座長】

私は、このSDGsが、流行で終わるということが非常に怖いと思っている。そういう意味でも、ESDとしてはしっかりした立場で、つなげていくということが必要だ。エデュケーションという言葉、これはラテン語のエデュカーレ、エデュケーレという言葉に源がある。その「命を育み、そして助ける、支援する」という意味合いから考えれば、いかにエデュケーション、ESDのEが重みを持つかがわかると思う。

#### 【委員】

私も協議会の立ち上げからのメンバーだが、やはり三角さんとか寺坂さんと一緒にやってきたという思いがあり、その中で、あの方達がやってきた姿を見て、今に至っている。

だから、ぜひ代表の知見を、私たちにも話をしてくれる時間がもっとあれば、いろんなことを学べるかと思った。今後も教えていただいて、そして協議会の可能性につなげていけたら本当に嬉しいと思う。

#### 【委員】

二点ほどお尋したい。

一点目は、子育て世代との協働について、今後どのようにして、具体案を進めていくのか。

もう一点は、配布資料4の21ページの成果指標の「市民一人ひとり～」という言葉が、このアクションプランの中に何箇所も出てくるが、私はNPOの組織の中の一人であり、団体について少し薄いと思うので、表現を工夫できないか。

#### 【事務局】

まず一点目の子育て世代との連携の具体案について、正直今まで、子育て世代との協働については、協議会として少し欠けていた部分があったため、今後は、幼稚園や保育所、あるいは小中学校の家庭教育学級の保護者の方に対して出前講座等を通じて連携を図っていきたいと考えている。

#### 【委員】

その時に教えに行くとか、伝えることももちろん大事だが、私が思うには、もう十分に活動されている方々もいるので、逆にそのような方々に、講座をやっていただくなども念頭にに入れてはと思う。教育現場だけではなくても、市民活動団体として、活発な方々もいるから、

ESD 協議会にそういう方をお誘いする企画を行ってはいかがか。ESD 協議会に参加しませんかとかいうお声掛けをするよりも、集まれる企画を作ってはと思う。

**【事務局】**

今後はそのような方々をぜひ紹介してほしい。今まで接点がなかったため、紹介していたら、一緒にユース活動を進めていきたいと思うのでお願いしたい。

**【座長】**

子ども子育てという分野では、北九州にはいろんな、積極的な活動がある。大学でも連携をしているが、ぜひこのESD協議会の中でも一緒に学び合えるよう、次のアクションプランの中では模索していただきたい。

**【事務局】**

二点目の質問の「市民一人ひとりが様々な社会課題を意識し〜」の成果指標について、こちらは、行政の市民向けのアンケートから数字を引用している。確かに団体について、本協議会で重きを置いているところで、個人と団体については、このアクションプランでは多く併記して表現している。

しかし、この成果指標において、団体の部分の数値は拾い上げるのはなかなか難しいと考えるので、先ほど他の委員が提案された、個人や団体の指標を考えていく中で、今後の課題として取り組んでいってとは思う。

**【委員】**

個人は数を追求しやすく、団体が難しいということであったが、随分前から、大学の先生やNPOハンドブックや市民活動サポートセンターなどの組織を通じて、たくさん団体にアクセスするラインもある。団体について、北九州は他の町の方から、うらやましいと言われるぐらい活発な部分もあるので、そこを置いておくのはもったいない。

それぞれの団体がしていることは、ESD そのものであったり、SDGsを目指していたりなど活性化しているところもあるので、ぜひ拾っていただきたい。

思いつきで申し上げているが、できることがあれば、お手伝いも可能と思っている。

**【座長】**

実際に次の5年間の中で、どういうふうに行うかということは、それぞれ考えている課題だと思うので、今日の意見を、具体的な形にするという中で、取り扱っていただきたい。

今日は検討会第3回ということで、課題を絞りながら議論をしていただいた。この検討

会の中で、多くの皆さん方が、ユースと企業、あるいは北九州市らしさというものを、学生や生徒が地域と連携し、体験的な活動を通じた連携の中で作り上げていこうという認識ができたと思っている。それを、実際のアクションとして動かすということが、このプラン策定後の仕事になると思う。多くの皆さんのご意見が、今後に繋がる活動になればありがたいと思っている。

皆さん方には大変貴重なご意見をいただいた。ご意見を元にしながら、アクションプランの2021年から2025年までの5年間の中で、実現させていきたい。

#### 【事務局】

このアクションプランは、先ほど説明のとおり最終的に、6月の協議会の総会で、会員の承認を得て策定される。

委員には、昨年度の第1回目の検討会より、今年2月の第2回、本日の第3回の検討会に渡り、ご慰労いただいた。

本プラン策定後は、プランに沿って、ESDの普及啓発や、推進体制の整備に取り組んで参るが、今後とも力添えをよろしくお願いしたい。本日の検討会は、これをもって閉会いたします。